ケルブレ著『冷戦と福祉国家―ヨーロッパ 1945～89 年』
第６章 非植民地化の時代のグローバルな文脈のなかのヨーロッパ

ヨーロッパのグローバルな諸関係・・繁栄期・・・６つの新しい展開

（１） ヨーロッパの新しい独自性

次の５つの特徴が見られた。

① 経済成長

1950 年代から 70 年代初期まで、ヨーロッパは年間約４％の経済成長があった。この間は、地域別にみてもヨーロッパの生産の比率は、人口比率が低下したにも関わらず安定していた。さらには、西ヨーロッパの国民総生産に占める輸出の割合は約９％から 19％へ、東ヨーロッパでは２％から６％へと増加した。

② 工業志向

1950 年代から 60 年代にかけた、ソ連とトルコを除き、就業部門のトップは工業。

③ 人口増加

西ヨーロッパの人口の増加は緩慢で、東ヨーロッパは２倍である。

家族・・・強い慈しみの時代・・未婚率の大幅な減少、結婚年齢の高齢化、低出生率

④ 都市膨張のあり方の違い

ロンドンやパリなどの 100 万人都市は成長がゆっくり。中規模都市の方がはるかに魅力をもっていた(アジアとの違い)。

⑤ 市場経済と国家介入との共生関係・・・西ヨーロッパの場合

1975 年には、西ヨーロッパの国民総生産の約 44％が国家予算。・・・市場経済への国家介入・・・市場経済の誤った発展を抑止し、近代化を図る・・・西ヨーロッパ独特の方式(この点は日本も)。

国家の介入・関与の具体例として、航空業、鉄道、自動車産業におけるルノーとフォルクスワーゲン、メディアにおけるテレビとラジオ、福祉関連支出、保健サービス、教育やインフラなどの都市計画、劇場、オペラ、博物館、コンサートホール、記念館、文化的記念建築物などが挙げられる。

（２） 脱植民地化

ヨーロッパのグローバルな結合も 1950 年代から 70 年代半ばにかけて変化。

根本的な断絶は、第三の非植民地化である。非植民地化の第一期(18 世紀 70 年代以降)、第二期(19 世紀初頭―30 年代、中南米)との違い。

① 独立運動が移住者(典型的にはアメリカ独立の場合。中南米も 1)でなく、その土地(アジア、アフリカ)の出身者によって行われていた点

② 第三の非植民地化で独立を達成した植民地は、国旗、国歌、首都、政府等に関

しヨーロッパの国民国家のモデルを見習おうとした点

第三の脱植民地化・・・54 年のヴェトナム、ラオス、カンボジアのフランスからの独立、63 年のマレーシアのイギリスからの植民地支配からの独立。

1946 年のフィリピンの解放と独立(アメリカから)

独立運動の３つのモデル・・・マハトマ・ガンジーによるインドの非暴力のモデル、毛沢東による中国の軍事的なゲリラ闘争のモデル、インドネシアのムスリムの国民的な独立運動のモデル

北アフリカ、アラブの西部での非植民地・・・リビアでは 1951 年、スーダン、モロッコとチュニジアは 56 年、アルジェリアは 62 年に独立。

サハラ砂漠以南のアフリカについてはガーナとナイジェリアが 60 年に、フランスの 14 の植民地とコンゴが 60 年に解放された。

非植民地化に対してのヨーロッパ諸政府は、インドネシア、インドシナ、アルジェリア、マレーシアそしてケニアにおいて植民地の独立を阻止するための戦争を引き起こした・・・しばしば批難された。

（３） ヨーロッパとグローバルな組織

ヨーロッパのグローバルな影響力の弱体化・・・戦後間もない時期における国際的組織の中での地位の低下によって。国連関係の諸機関・・・本部はパリ、ローマやジュネーブに・・・しかし、アメリカとソ連を差し置いて決定権を持つことはなかった。1960 年代と 70 年代には西ヨーロッパの国際機関の指導的地位は後退していった。一方で、国際的な非政府組織は、相変わらず西ヨーロッパの影響を強く受けた。

（４） 冷戦

冷戦によって非植民地化や世界的組織におけるヨーロッパの影響力の低下

・・・ヨーロッパと他の世界諸地域との結びつきは減少。冷戦の中でアメリカとソ連は地域的な軍事的政治的同盟を創出。ＮＡＴＯ、ワルシャワ条約機構など。これらはヨーロッパ外部へは展開していなかった

ただ、1950 年代からは、開発政策によってヨーロッパと他の世界地域（西ヨーロッパを除く）との新たな結びつきが生れた。・・・ヨーロッパの植民地列強による植民地の近代化政策に似た原理で実施、アフリカ、ラテンアメリカ、アジア諸国を北のモデル、すなわち市場経済モデルか共産主義モデルに従って発展さ

せることを目指した。こうした開発政策は、植民地をもたなかった諸国によっても支えられた。

（５） 移住と旅行

ヨーロッパの 1960 年代以降の植民地からの撤退や国際機関における権力の喪失・・・多くのヨーロッパ人がアフリカやアジアから祖国に帰還

その数、1940 年から 75 年までの間に約 700 万人

この帰還によりヨーロッパとアフリカや大西洋地域との結びつきは以前にもまして堅固に

一方で、かつての植民地のエリート層は、子息や子女の留学先や家族旅行先としてアメリカあるいは一部はソ連を選ぶようになり、ヨーロッパは選ばれなかった。逆にヨーロッパ人が大西洋地域の外に出かけるのは一部であった。

（６） ヨーロッパと世界公衆

アメリカの１人当たりの国民総生産は、ヨーロッパ諸国よりもはるかに高く、生活水準が高い。

ヨーロッパは第一次世界大戦でグローバルなモデルとしての信用は失っていたが、第二次世界大戦によりさらに落ち込んだ。そして植民地戦争によってその名声も失墜させてしまった。

ただし、福祉国家と文化においては例外で、指導的役割を果たした。福祉国家については、第二次世界大戦後、国家的な社会保障のモデルとなった。特にイギリスとスウェーデンにおいて。

文化では、古典的なヨーロッパ文化、音楽、絵画、建築、哲学が世界中からモデルとしてみなされ、この分野では世界のエリートの子息、子女の留学先として魅力的。

総括的に見ると、1950 年代から 70 年代初期まではヨーロッパのグローバルな結合は停滞しており、福祉国家や文化（ハイカルチャー）といったごく一部の領域でのみグローバルのシンボルとして認められた。